

# 男歌男が見つめる世界 屋良健一郎

奥田亡羊の第二歌集『男歌男』（短歌研究社）を読んだ。寂しさや虚無感が漂う歌集だと感じた。

- ・ 流木の流れぬときも流木と呼ばれ半ばを埋もれてあり
- ・ 火を盗むおとこ絵本をひた走る火に盗まれてゆくように見ゆ
- ・ 柿の木の下に子どもはよろこべり青く小さき柿の実の降る
- ・ ふかふかと桜枯れゆきふかふかと子は生まれ来ぬ 家の息づき一首に同じ語が繰り返し出て来る歌が目立つ。「流木」が繰り返されることで、言葉と現実との落差に寂しさが生まれる。「火」をどう見るかで世界が反転する意外性。三首目、「子ども」と「よろこべり」の「り」が強く響き、それに比すると「柿」がなんだか弱々しい。「柿」を繰り返すことで、眼前の柿を柿たらしめようとしているようにも感じる。四首目、「ふかふかと」を繰り返すことで、月日を進め、生命の循環を生み出している。これらの歌は、一首の中で同じ語を繰り返し返すことで、世界の手触りを確かめようとしている。逆に言うと、そうでもないとしたこの歌集の中の人や物は確たる存在を持ちえないほど、はかないのだ。
- ・ 遊園地のパラシュートにのる我と娘 手を振る我が小さく見える

パラシュートの中にいる我と、地上にいる我。我から我が離れて、二人の我が存在しているように読める。この歌集の登場人物

たちは、このように離れていたり、消えかかったりする。

- ・ キッチンになにかつくりてかそかな音となりゆく人とわが棲む
- ・ 水栓を抜けばいくたび折れ曲がりわれを離れゆくひとすじの水
- ・ とんかつが無くなり食いし人が去り椅子つつましく向き合いており

一首目、同居人の存在が徐々に薄れ、やがて完全に消えてしまいうような危うさ。二首目と三首目、「われ」を離れてゆくものや、眼前からフェードアウトしてゆくものが詠われる。

- ・ 滝壺に刺さりたるまま二万年身じろぎもせず滝は驚く
- ・ 黒々と聳ゆる砂利の山を噛みパウシヨベルの錆びて傾く
- ・ 石像となりたる夢に石の首落として千の椿咲かしむ
- ・ 渋谷交差点に赤べこの首ゆれいるを美しく撮るこの世の終わりに人間には計り知れないスケールで存在している自然、無人のパワーシヨベル。これらからはあまり人の気配は感じられない。フェードアウトが続いた果ての、静かな世界がそこにはある。

ところで、この歌集には「男歌男」なる謎の人物が出て来る。一九七〇年代にアメリカで俳優と踊っている（七〇頁）かと思えば、江戸時代の版画にも姿が確認される（二六頁）。ヒヨコのように性別を鑑別された（九四頁）かと思えば、空を飛んでいる（一三〇頁）。コミカルなようで、ただ者ではない。時空を超えて、様々な時・場に現れる。絵本『ウオーリーをさがせ！』のようでもある。男歌男は世界に干渉するわけではなく、私たちの傍に自然に溶け込み、世界の変化を、終末を見つめていく。達観した存在である男歌男が、この歌集の虚無感を増しているように思う。